

特 251

342

1020

14

久米

講話

第 三 輯

偉い人と良い人

矢吹慶輝

動物供養の法話

大島徹水

主人學の修業

相馬愛藏



始



特251
14

講話

九巻

次 目 刊 既

輯 二 第

輯 一 第

(版 三)

(版 四)

印度の實情	商店經營の實感	報恩感謝の念に就て	和を以て尊と爲す	立派な商人になるには	榮養の話	人の一生の基礎
ボース	相馬愛藏	徳富蘇峰	高島米峰	木下尚江	鈴木梅太郎	若宮卯之助



正

昭和十二年五月元旦

中村屋

相馬愛藏

相馬良

パールビーズ

相馬安雄

四方千香



分り易いのですけれども、學者のお仕事は洵に地味で、吾々凡俗の者には解らない、その解らないところに非常な隠れた努力を以て研究を爲すつていらつしやる。學者のお仕事は私共に文化の本を教へ、さうして將來の發展の爲にどういふことをすればよいかを私共に指導して下さるのであります。

もう一つ申したきことは、私共渡邊海旭先生に御厄介になつて居りましたが、御亡くなりになつて以來は、矢吹先生に相馬一家が始終御指導を願つて居るのであります。

今日お忙しいところを態々お出で下さつたのですから、どうか皆んなも謹聴して下さるやうに願ひます。

(中村屋主婦黒光挨拶)

小傳 明治十一年福島縣に生る、同三十五年一高に入学、同四十二年七月東大文科大學卒業に當り御賜銀時計を受く。大正二年より六年迄英米他瑞露巡歴、同十一年より十二年迄再度渡歐。十二年學位を受く。十三年皇太子殿下に御進講申し上げ、昭和二年より三年にかけ秩父宮殿下に御進講申し上げ。大正十四年四月東大助教より東京市社會局長となり、同年五月帝國學士院より恩賜賞を受く。現在大正大學教授の他、日本、東洋、法政の各大學講師たり。著書に「阿彌陀佛の研究」「三階教の研究」「鳴沙餘韻」「思想の動行と佛教」等。

只今御紹介に預りまして、そのやうな偉いことを研究した譯でも何でもないのです、甚だ恐入つたのであります。今日はこちらへ参りまして、何かお話をするやうにといふことでございましたが、約一年ばかり相馬さんのお宅で毎月お話して居りますので、同じ話を焼直して申上げること、中に聴いたお方があれば面白くないことだと考へまして、取敢ず題目を「偉い人と、良い人」といふことに致しまして、今日これから一時間ばかりお話をさして戴かうと思ふのであります。

私共人間——これは支那人が附けた名前が「人間」でございますが、私共先祖傳來の言葉では「人」と申します。「ひ」の字は太陽の「日」ださうでありまして、「日と共に」、「日の友」或は「日止まる」といふ三つの解釋があるやうであります。それはどちらでも宜しうございます。お月様などは始終變るけれども、お天道様は何時も圓滿で少しも變らない。吾々の心の中には犬や猫のやうな譯のわからぬ心ぢやない、何でも揃つた丸い心があるといふ意味で、吾々の先祖は吾々を「人」と名付けて呉れた。お隣りの支那では正面から眺めた貌では「大」といふ字を書くさうですが、側面から横の姿で見たから、かういふ風に「人」といふ形を取つたといふことを申して居ります。印度の言葉では「マヌシヤ」それと同じ語系の英語でも「マン」、ドイツ語でも「マン」、「マン」といふのは「考へる」といふことであつて、他の動物は考へない。雨が降つてどうするか、向ひの猫が外套を著て出たといふことはないので、雪が降つたらどうするか、こちらの犬が防水布を著て出たといふことはないので、支那人は萬物の靈長と賞めて呉れた。「どうするか」を考へない。吾々はさういふ時に「どうするか」を考へる。支那人は萬物の靈長と賞めて呉れましたし、日本では日が止まると煽つて居りますが、果して私共はそれに相應しいものであるかどうかを考へて見ますと、自分の眼で自分の鼻の下も見られない。鏡を見ますから私の顔がどんなであるか、鼻の下がどうなつて居るかが分つて居りますけれども、若しも鏡の無かつた時はどうであつたか、たとひ鏡があつたとしてもそれが嘘を寫したと考へましたならば、自分で自分が判らなくなりませう。一體自分の鼻の下がどうなつて居るか、判らぬやうでは實に不安な話だと思ひます。鼻の下などはどうでもよいから男の人などは我慢をして居りますけれども、女の人は神経質に考へたならば、一體自分の鼻の下はどうなつて居るかと甚だ不安に感ずるだらうと思ひます。自分で自分の脊中を見ることが出来ない。自分の脊中を自分の眼で見られるやうな工合に首が廻る人間であつたならば片輪であります。斯ういふ風に考へて見ますと、萬物の靈長として偉いことを言ふけれども、實際は自己反省の立場に立つて見ますと、どんな人でも弱い方面があり、暗い方面があり、いろ／＼その方面で考へさせられる點があらうと思ふのであります。

さういふ意味で考へますと、私は人間を大體三つに分けて見たらどうかと思ふのであります。偕てその三つの型を申上げる前に一寸申添へて置きたいことがあります。と申しますのは、私共はどうするかを常に考へて居る者であり、固い言葉で申しますと、人間は理想を有つて居るものだといふのであります。偕て理想とは何んだと言つた時に、私共の文化を構成する、文明を形造つて行く爲には、第一に大切なものは形の上からは富であります。お金であります。第二はその富を旨く分配して行く權力であります。第三はその富と權力との方向を示す目標になる智力であります。政治と經濟と知識と、この三つが恰度五徳の三つの脚が揃つて居りますれば倒れないやうに、政治と經濟と思想と、この三つは皆力であつて、どれでも大切なものであります。しかしここで考へなければならぬことは力とその力の方向といふことであり、力と力の方向は違ふ。

この間、國技館の夏場所で誰某といふ力士は大變豪勇を振つたといふことを聞きましたが、あの力士がこの新宿の中村屋の前に来て、人通りの多い所で「俺の力は十人力、誰も敵ふ者はないであらう。」と言つて、通る人毎にその頭を撲つたならば、こんな力は賞めた力でなく、あつてならない力であり、早速片付けてしまはなければならぬ力であります。警察から来て貰つてそんな力の持主は拘留をして貰はなければならぬ力である。だがこの力士が、一夜ちやん／＼半鐘がなつて火事だといふ時に、行つて見ると硝子戸の中で右往左往して居る人がある。力のない私共には手が出せませんが、幸ひにその十人力の力士が中に入つて、私共は一人でも抱へられないのに、五人一緒に抱へて窓を破つて助け出したならば、それは讃むべき力であり、なければならぬ力であり、だから單に力があるといふことだけが偉いのではないのであつて、その力の方向が善く正しい時に偉いのだといふことが分ると思ふのであります。

斯ういふ見方で見て参ります時に、偉くて良い人が世の中にあります。例へばお釋迦様でも、イエス・キリスト

でも、支那の孔子聖人でも、ベルシヤのゾロアスターでも、それは偉い人であつて且つ良い人であります。ちやんと力の方向を決めて居る人であります。この人々は何年経ちましても、年が経つ毎に想ひ出を新にして、世界中の人が手を合して拜むのであります。これは良い人と言ひ得ることは勿論であります。偉い人、力を持つて居る人であるといふと、ベルシヤのダリウス、ギリシヤのアレクサンダーとか、日本では太閤秀吉とかいふやうな人は偉い人ではありますが、良い人であるかといふことはちよつと問題だと思ふ。取敢ず手を合して拜むといふことはありません。斯う考へますと偉くて良い人は主に宗教的天才であります。唯だ偉い人、それは重に政治上軍事上に於ける英雄豪傑だと思ひます。偉い人で善い人であればこの上もないことですが、私共は偉いことは容易に出来ません。そこで良い人にもなれないといつたのでは私共は甚だ困るのであります。偉いことをやらうと思ふのは時と處と境遇との關係で、さう偉くない人でも偉いことが出来るのであります。だが運命と申しますか、何と申しますか、蛟龍も雲を得れば遂に地中のものに非ずですが、雲を得ざれば仕方がないといつたやうなことが多いのであります。時運際合せざれば如何ともすることが出来ないことが、往々人生にはあるのでありますから、斯ういふ意味に於て、一體私共平凡の人間と致しましては、何を目的とすべき、何を目標とすべきであらうかと申しました時に、私は偉い人にはなれなくても、良い人になりたい。斯ういふことを念願して居る者であります。勿論良い人にも深い高い處は到底私などは手が届きませんが、せめて人様に餘り迷惑をかけない程度の良い人になりたいと思ふのであります。

昔大阪城で秀吉が——これは恐らく講談師が拵へた話だと思ひますが、併しなか／＼味がある話でありますからこゝに申上げるのであります。——謎をかけた。それは「この世の中で多う過ぎて困るもので少な過ぎて困るものは何だ。」といふのであります。西洋ではスフィンクスの謎と申しまして、「朝は四本の脚で立ち、晝は二本で立

ち、夕方になると三本の脚で立つのは何だ。」それに答へられないのは食つてしまふ、それは何であるか。「赤ん坊の時は四つ匍ひだから四本脚で、大人になると二本で立つが。老人になると杖をついて三本で立つ。」さう答へたのが満點だといふのでありますが、秀吉の話も似て居る。「多う過ぎて困るもの、少な過ぎて困るもの」。誰も答へられない。そこへ曾呂利新左衛門が傍から進み出でまして、「それは人間だと思ひます。」と答へた。どうしてそれが人間かと問はれると、あの人でなければ頼めない、あの人でなければ話せないといふ人を探しますと、世の中には少な過ぎて困る、「あの人でなければならぬ」といふ人を探すには容易ぢやないが、あの人が入つて呉れては困る、あの人と關係しては困るといふ、「あの人では」といふ人を探すならば天下さらにある。「多う過ぎて困るものも人間であります、少な過ぎて困るものも人間であります。」と答へたといふことですが、私共はあの人でなければならぬといふ場面をどこかで掴んで、自分の一生の間にそれを守つて行くといふこと位大切なことではないと考へるのであります。

さういふ意味から私は貧乏な百姓の子に生まれて——まだ昔話をする程年を取つて居りませんから昔の話を致す譯ではありませんが、七つの時に自分で納豆賣をしたことがあります。「納豆！ 納豆！ 糸立ち納豆！」と言つて賣つて歩く。経験のあるお方があるかどうか存じませんが、冬の朝、東北の雪の中でやることはなか／＼樂ではなかつたのであります。さういふ経験を有ち、且つ今及ばずながら書物を読む方面で居りますが、その間に自分で守るべきことといふのは極て簡單なものであります。偉い人には到底私共凡人はなれませんが、切めて他人様の邪魔にならない、どこかの方面で役に立つ人間になりたいといふことを念願して居るのであります。それは一言で申しますと、正直で、利口で、出来るだけ親切で一生懸命に働く、たつたこれだけのことであります。私は今日まで逆も思ふ通りにはなれませんが、さういふ氣持で毎日働いて居ります。そのことを申上

げたいと思ふのであります。良い人にならうといふにはいろ／＼の方面がありますから、逆も一つや二つでは盡きないと思ひますけれども、私自身が良い人になる道かと尋ねられたならば、只今の正直で、利口で——それだけで澤山なのでありますけれども、もう二つそれに附加へまして、成るべく親切に勤勉に——本當は「成べく」といふやうな卑怯な言葉は使ひたくないのであります。「親切にせよ」と言つても、なか／＼他人様に親切が出来ないだから出来るだけ親切に、さうして勉強せよ、この四つであります。

私は御主人から頂戴致しました「講話」といふ冊子を読みました。先づその中の御主人のお話になつた「商店經營の實感」といふのを読みました。徳富さんも讀みました。「中村屋のライスカレーが旨いといふので、ライスカレーを食べに店に來たところが、講演を頼まれた、この講演は半分はライスカレーの爲である。」といふ巧いことを言はれたの讀みまして、ライスカレーは甘かつたでせうが、徳富さんの御話も巧いと感じました。それはマアどうでもよいが、御主人は早稲田を出られて、三十四年に商賣替を爲さつて、帝大の前に中村屋といふパン屋を始められた、それから三十九年に此處に移られた。あれを讀んで考へますと、その頃私などは一高から帝大へかけての時代で、さう言へば若い學生は中村屋のパンを——奥様もその時分は若かつたし、御主人は早稲田出のインテリだ——尤もインテリといふ言葉はその頃使はなかつたが——一遍買ひに行つて見ようかといふので、私も買ひに行つたことがあります。甚だ貧弱なお得意であつたわけですが、その時一二度御顔だけにお會ひをしたやうな記憶を有つて居りますので、お懐しいと思ひまして段々讀んで參ります中に、私は大きな教訓を得たのであります。

今御存知の通りデパートが殆ど東京の商權を握るやうな形勢になりました。私共も中小工業が如何にして成り立つかといふ問題に付て、中堅建設同盟といふのがありますが、名前だけでありますけれども、その顧問を致し

て居りますので、緊々と感ぜられたのであります。呉服類の如きはデパートが七割も賣つてしまふ、中小の小賣商は僅かに三割だけを賣つてその中から儲けなければならぬ、而も大多数——小賣商は十四萬もある、それが十に過ぎないデパートと競争するといふことでは、日本の中小工業はどうなるか。農村ばかりの問題ぢやありません。昨日内務大臣官邸で社會事業調査會がありまして、いろ／＼お話を伺つて來たのであります。日本は農村ばかりの問題ぢやない、中小商業もなか／＼多いのでありますから、斯ういふ意味から考へて、何故中小商業は立てないのか。若しくは如何にすれば立つのか。斯う考へます時に、正札主義で押通して行く、サーヴ、スと稱して、景品などを附けてお客を釣出すやうな方法を執らない、福引も特賣も一切しないといふお店の方針を讀みました時、そこだと實は感じたのであります。就中私は——さう御主人のお話になつたことばかり採つて居りますと、私の講演でなくなつて、御主人の講演になりますから、他のことは抜きますが、唯一つ抜けないことがあります。

それは良品を飽くまで廉價に提供する、是は實に商賣だけでなく總ての方面に適用されると思ふのであります。良い品物を安く賣るといふことは——イタリーのムツソリーニが七八年前に、日本品を批評したことがあります。日本といふ國は困つた國である。第一子供が生れ過ぎて困る、ヨーロッパ人が世界の繩張を決めて居ります時に、日本の人口が繁殖すれば何處にか捌け口を見出なければなりませんから、日本が産み過ぎて困る。餘計な話だ、私共は西洋人に頼んで子供を育てて居らん、だが世界の大部分から考へると心配だらうと思ひます。第二は、日本の兵隊は強くて困る。爆弾三勇士といふことは外國にはない。人間の身體を掛けて爆弾にするといふことは西洋人には豫想も出来ないことである。第三には、日本の外交は近頃自主的になつて困る。向ふ見ずだから困る。それは近來のイタリーに當て嵌ることだとも云へる。この三つは序でだから申したのであります。第四には、日

本の商品は良くて安いから困る。是は最近に於ける日本の海外貿易がどうなつて居るかといふことを御承知の方は成程と首肯することだと思ひます。ヨーロッパの商品を驅逐して日本の商品が國際的に進出する。滿洲事變、國際聯盟離脱の頃には随分尾緒をつけて日本を酷評する風がありました。併ながら日本の商品はどん／＼羽が生えて賣れる。それは良くて安いからであります。この良くて安いといふことを人間として考へます時に、良くて正直で無駄がなくて間に合ふ人に失職失業がないと同じだと見てよからうと思ひます。

その次に商店經營の實感を讀みました中で私の心を惹かれましたのは、勝れた人物を澤山集めて快く働かせる。これは實に私も愉快に讀んだのであります。それには人間が利口でなければならぬと思ふのであります。伊藤博文公が或る料理屋の女主人に頼まれて、「御前はいつでも難しい、固い文字ばかり書いて居られますが、一つ私の一生の爲になることを分り易い文字で額に書いて下さい。」と言はれて書いたのが「正直で利口であれ」實に考へて見ると味合がある。利口の人間は正直になれません。「あの人は正直だ」などと言ふのは、實は頭が足らんといふことである（笑聲）「正直の頭に神宿る」と言ひますが、「あれは佛様だ」と言ふのはちよつと足らんといふことである。佛といふことは結構であります。あれは佛だといふことは、良過ぎるといふことで、利口と正直とはどうも兩立が難しい。良品を飽くまでも安く賣るといふことは、商賣が正直だといふことであると思ひます。手品も種を見せられると感心しなくなるやうに、女にお化粧は大切だが面前でやられては興が覺めるやうに、特賣などをして、商賣に關係がない妙な物を店頭飾つて、入ると餘計なお世辭を言つて、お客の方では却て、こゝんなお世辭を言はれて、お世辭の代までも取られるのではないかといふ心配を懸けるのはいかんと思ふ。勝れた大勢の人物を適材適所に置いて働かせるには利口でなければならぬといふことは、味ひのある言葉であると思ひました。それは商賣上のことばかりではなく、吾々がこの世を送る上に大きな指針であると思ひます。

もう一つはこれも講話の中で前に讀んだ印象であります。「お客を馬鹿だと思つて騙す氣になるな」といふ意味のことをお書きになつた。流石にと考へました。人間は同じことを本を讀んで鸚鵡返しに喋るのは何でもないが、長い間積んだ経験からのお話には深い味がある。私共も相手を馬鹿だと思つて胡麻化すならば、學者でも通るものではない。お客様は馬鹿ではないといふ教へは、或る意味からバイブルであり、お經の文句であると思つてよいのであります。併ながら世の中の人々は騙せば騙せると考へて居りますから、商賣人とか、商人といふ言葉は、日本では———今後はいざ知らず———今日までは油斷のならないものだといふ感じを持たしてしまつたのは、甚だ利口なやり方ではないと言はざるを得ないのであります。

ソクラテスがその昔、弟子等が「先生は偉い偉い。」と街では先生を賞めて居ります。「と言ふのを聽いて、「俺は何も偉くはないけれども、餘所の偉い人は自分の馬鹿を知らないが、俺だけは自分の馬鹿だといふことを知つてゐる、偉くはないがそこが違ひだ、そのことを街の人が偉いといふのであらう。」と言つたといふことでありませう。孔子の言葉に「君子は愚なるが如し」といつて居る。馬鹿ではない、愚なるが如しである。斯う考へますとお客さんは利口なものだと知つて居るといふことは、その主人の頭が如何に利口であつたかといふことを語つて居ると思ふ。でありますから私共は正直にこの世を送るといふことと、もう一つは利口であれといふこと、この二つが本當に自分の身に實現せられた人は、大きい小さいは別として、決して事に當りて不成功はないと思ふ、詰り何かの場面で役立つ人だと思ふのであります。

人間はいろ／＼の場面があります。芝居の舞臺を見ますと、殿様になつて居る者もあり、家來になつて居る者もあり、女中さんになつて居る者もある。芝居の主役は殿様ぢやない、殿様は黙つて座つて居ればよいのだから、馬の脚の下役でも勤まるが、本當の主役は樂屋に行つて見ると舞臺とまるで違ふ。人生には舞臺と樂屋とがある。

斯う考へますと、床の間の床柱は一家の主人のやうなものである。皆が來て良い床柱だと賞めます。ところが床柱は一本なくともその家は潰れませんが、土臺が下にあつてそれを抑へて居る、土臺こそ大事である、土臺は人の眼に著かない、家を建てる時にちよつと目の目を見たばかりで、後は圍まれてしまふから、お天道様も拜めない。家が建つて住めるやうになつてゐるには、天井だの梁だのもなくてはならない役目を演じて居る、縁側もさうです。今は人に使はれて居る縁側になつた、とき使はれて居る小僧だけれども、どうしても縁側を踏まないでは床の間に行くことが出来ないであります。斯ういふ風に考へますと、一家の中に主人もあり、奥様もあり、いろいろの人があるが、その人々はなくてはならない役目を各々果すのである。そこに人生の眞の味ひがある。舞臺の裏から見て本當に偉いといふことは、表面には現はれないが、丁度女中さんが洗濯をするのに自分の手を綺麗にするのが目的ではないが、着物を洗つてる中に自づと自分の手も淨められるやうに、人に見られずその家を支へて居る偉さは樂屋での隠れた併し大きな力である。椽の下の方持ちは決して見通してならない、日露海戦の日本の大勝利の裏には甲板上での活劇は見えないで仕舞つた火夫の手柄を忘れてはならない。それは樂屋の偉さである。私共は舞臺での偉さは到底得られません、樂屋の偉さは誰でも得られる。それが宗教であり、道徳であると思ふのであります。政治や經濟の世界では事功が主になりますが、信仰と道の世界では自分の心が淨ければ世界を擧げて神國とも淨土ともなると説くゆゑんであります。

さういふ意味から考へますと、私共は日夜の生活の中に正直が第一であるが、その正直に利口が加はらなければ駄目だ、なか／＼面倒だが一つさういふ方針でこの人生を送るといふ考が、いろ／＼の場面に遭遇致しまして、これは私の飾らざる、偽らざる感想であります。それなら決して人に廢りはないといふことを固く信ずるものであります。

利口といふことは智慧でありますから、智慧といふものは大切なものであります。だが智慧ばかりで以て、利口ばかりであつたら、人間はどうなるかといふことを考へますと、佛教の書物の中に智慧を鹽に譬へて居ります。それは或る印度の山の中に住んで居ります者が、鹽がありません爲に、物を煮炊きを致しても鹽梅を附けることが出来ない、即ち鹽を入れずに煮炊きをして食べた。ところが偶々町に出て参りますと、鹽を加へて煮て呉れた物を食べさせられたので大變美味しかつた。「なんでこんなに美味しいか。」と言ふと、「お前の山の中では鹽がないが、鹽で味を附けたのだ。」鹽といふ物はそんなに美味く食はすものならば、大根や人参は山の中でも食べられますから、どうぞ鹽ばかり食はして下さい。」と言つて、鹽ばかりを食へて見ると、苦くて、辛くて食べられなかつた。これは子供騙しのやうな話であります。味ひのあることだと思ひます。最近日本の教育界でも智育偏重の弊が叫ばれてゐる。唯だ知つてゐるだけでは活きた字引に過ぎない。活きた人間がその字引を活用しなくてはならない。鹽ばかり頭に填め込んで、人間は利口にさへなればよいといふ氣持になつては固る。世の中が通れません。さうした反動が今現に觀面に日本に現れて來たと思ふのであります。人間利口でなければいけません。併し鹽ばかりでもいけない。鹽は小出しに出して行く。道を行くには眞直に行かなければならぬが、蟹の横這ひは蟹の道である。鼠が梁を傳はるのは鼠の道である人間の道を外れないやうに進んで行くにはどうすればよいか、唯正直では世の中は通れない、その正直に利口の鹽を時々入れて行く、それがむづかしいところだと思ひます。伊藤さんが「利口で正直であれ」と額を書かれたといふが、道に人生の苦勞を嘗めた人の言葉には、言ひ知れない面白があると思ひます。

この二つの道に依つて進みたい、だが私共はこの世に生活致します間にはいろ／＼のことがありますので、自分正直で利口だと思ひましてもなか／＼力が及ばない。さう旨く軌道に乗らない。地球が遠心、求心の二つの

力に依つて保つて居る、一方だけ働いたならば地球が何處に行つてしまふか分りません。求心力だけではお天道様に地球がくつ付いて吾々は焼け死んでしまひます。又遠心力だけでは空に拋物線を描いて地球が吹つ飛んで吾々が生きて行なれない。これらの二つの力が調和を保つて行くところに丸い軌道の人生が現はれるのであります。利口ばかりでは人間が冷やかになり、正直だけでは情にほだされて溺れて仕舞ふ。何んでも極端では通れない。西洋の諺に「極端は自殺なり」といふのがありますが、人生はその通りで、動いてはゐるが眼のない手足と動けないが先きの見える眼とが揃つて始めて人生の向上があるものだと思ひます。

それからお互に厭な氣持で世の中を送らないといふこと、餘り固くなつては萎縮して仕舞ふから注意しなければならぬと思ひます。この六月三日に東京市から出ました統計に妙な統計がある。世界の都市中でのこの都市が一番自殺者が多いかといふのであります。この統計を見ますと——この間朝日新聞がそれを社説に書いてありました——ベルリンが世界第一位に都市中で自殺が多い。その次は日本の神戸、甚だ名譽ある譯であります(笑聲)。日本の神戸が世界第二位に自殺者の多い市である。それから第三、第四、第五……と竝んで参りました。ロシアンゼルスがたつた一つ入つて居るだけで、始めの方は全部日本の大都市である、何といふ話であります。一方では躍進日本である、強くなつた日本であると言つて居りながら、世界に於ける有数の自殺都市を有つ國であるといふことは、而も大抵二十歳前後の人が多いといふことを考へますと、何故自殺するのか、どこに行つてもないから、相手にする者がないから、この世に生きて行く目當がない。相手にして呉れないから情なくなつて死ぬ。私は朝から晩までもて／＼しようがないから死ぬといふ人は世界のどこにもあるものぢやない(笑聲)。何故もてない、それは結局他人様をもてさせないからである。それは皆さん商賣でよく御存知でせう。一體、人から惚れて貰はうといふには自分から惚れなければ駄目です。黙つてみて「なんで俺に惚れないか。」と言つても、

誰が惚れますか。お互ひ同志感應道交でありますから、人にもてようといふには他人様にもてさせなければならぬ。他人様から親切を受けたいならば、それは自分が親切を盡すことだと思ひます。

世の中には色々な人がある。同じ顔の人は世界中捜し廻つても二人とはゐない。「鼻につく人」もあり「煙つたい人」もあり「アクの抜けない人」もあり、そこで朝夕私共が接觸する人にはいろいろの型の人があります。「どうもあの友達は會つて挨拶しても眼つきが變だ、俺の挨拶が不平なのか。」と、それをきつかけにして朝から晩まで不愉快だ、そんなことばかり考へて居りますと人間どうかなつてしまふ。相手本位の好かれ方をしようとすると、切りがありません。誰が何んといはうと自分は眞心でやつてゐるといふ自信のある人は乾度人に好かれる。誰に會つても愉快な氣持で他人の氣持を外らさないやうにと親切の心が出れば自分の氣持が潤く。そこが日常生活の上に大切なことだと思ふのであります。怒つた顔をして一度鏡を見て御覽になれば——私共もなか／＼やれませんが、怒つた時にちよつと鏡のところに行つて、怒るのを暫く休んで鏡を見ますと、どうも元來餘り良い面でないところに怒つた面といふものは見られたものぢやない（笑聲）。あの面で他人様を睨めては、それは向ふだつて癪に障るに決つて居ると深く感ぜさせられる。電車に乗つて向ふを睨める、向ふも「生意氣な奴だ」と睨んで来る、といつて他人様の前でデラ／＼笑つてもなりません、程を過すといけませんけれども、ニコツと笑つて向ふを見れば向ふも睨め返しはしません。吾々は分りきつた眞理を味ふ、その分りきつたことがむづかしい。本で見ても分りきつたことは澤山ありますから、それを掴んで人生の寶を拾ふことでもあります。

毎日お店で働いてゐて、このお店の方針などを考へる。何んで本郷のちつぽけな中村屋がこんなに大きくなつたか、それは商賣の中に正直と利口とがある、將來この新宿がこんなに發展するであらうといふことは一寸想像がつかなくつたでせう。私も書生時代にこゝに来て辨當代りにパンを買つて行つたことがあります、こんな野

原の眞中に——野原でもありませんが、それは寂しいところであつた。それが正直と利口とくつ附いたから今日の中村屋がある。お客に對してくだらん割引などはしない、その代りに良品商品を安く賣る、これは親切だと思ひます。或る人がアメリカに行つて、或る先生に附いて勉強して居ると、「俺のノートを取るのは止めろ、十年經つと役に立たなくなる、そんなことは止めて、俺が學者として如何に研究して居るかといふ方法や眼の着け處を覺えて居ればよい。」と言つたといふことであります、それは皆さんもこのお店に来て箱パンの作り方を覺えられても、箱パンの作り方はいろ／＼變るだらうと思ひますが、お店の經營方針のその魂になるところをお掴みになるのが生きた教訓だと思ふのであります。

那須與一が屋島の戦に於て源氏方から出て行つて平家の目の丸の金的を射た、敵も味方も拍手喝采したといふ話があります。これは誰でもさうです。ところが、或る一城の殿様が、——一寸名前を失念しましたが——他の者は金的を射たことを喜んで居ります時に、この話を聞えてさめ／＼と涙を零して泣いた。那須與一が金的を射中てたのは嬉しいに相違ないが、若しも番へた矢が弓矢八幡射損じたならば、日頃短氣の御大將、義經がどんなに怒るか、味方の面目をどうするか、俺の一生はどうなるか、國の身内のものがどう思ふかといふことを考へた時に、心の中はどんなであつたらうか、申つたのは嬉しいが、その心中を思ふと不憫で涙が零れてしやうがないと。「言つたといふ話があります。表面から見ますと堂々たるデパートに對して、一人一店主義で確かに帝都に於ける特異の存在、或意味では一つの脅威としての存在となつたその裏には、随分涙ぐましいお話が澤山あつたらうと推測されるのであります。私共もその積りで、金的を射たことばかりを考へないで、金的を得るにはどうしたかといふことを考へて見る必要があると思ふのであります。

私は田舎の百姓の子でありますので、小さい時分に町の老人連中が時々夕飯を食つた後など店前などに集つて、

のりくらりと世間話をするのを聞きました。その話の中で一つ忘れないことがありますのは、或る老人が若い者を犬勢集めて得意になつて話をする。「お前達は何れ女房を買ふであらうが、女房を買ふ時は金持の家から買ふことばかりを考へるな、何んでもよい上り身代から買へ。」と言つて、その實例を挙げましたけれども、その實例は覺えて居りませんが、上り身代の家から買へといふのは大變味がある。あの家は外から見ると土蔵が幾らある、大變裕福相に見えても實際は中は火の車だといふやうな家は、必ず一家が和合しない、統一しない。旦那は毎日遊んで歩く、奥さんは旦那に敗けないで、旦那が使ふならば私も……といふやうに、調和の悪い家である。どんな家でも上り身代の家は一致團結してやるからその家は見えるのであります。聽て没落の機運に瀕して居る家から嫁を買へば後が面倒でしょうがない。今では大變お若い方もおゐるのでやうでありますから、老人から聞いた思ひ出話を皆様にお傳へをした次第であります。これは決して間違ひがないと思ふ。その中に深き人生の眞理が入つて居ると思ふのであります。

先程奥様から私が三階教の研究をやつたといふやうなお話がありましたが、どうもそんなものは面白くもない。實は他人の相手にしないものを——私は頭が良くないから、他の者の取るのを取つては駄目だと思つて、誰も手の著けないのをやつただけでありまして、何も私の功績でも何でもないのであります。三階教といふのは一つ面白いことがあります。それはこの三階教を開いた信行禪師といふ人は、恰度日本で推古天皇の二年に佛教が始めて公然傳道を許された年に没くなつた人で、聖徳太子の頃の人であります。この人が街を歩くと皆んなの人に對して手を合せて拜んだ。長安といふ都は大分人間が居つたでせうが、長安の町に出て、一人毎に拜んで居つては、街を歩けなかつたらうといふ疑惑を懐く人もありますが、兎に角人様を見れば必ず拜んだ。「總ての人の心の中には靈妙不思議な働きがある、佛は元人間である、即ち總ての人には皆それぞれ佛になる種子があると思へば、

どの人も皆な佛様と思つて拜まなければならぬ。」と言つて、街を通ります時に他人様に向つて拜んだ。最後には虫けらまで拜んだといふ話があります。世界の多くの歴史の中にもよつと斯ういふ話は少いと思ひます。

若し私共が本當に互に親切な氣持で、愛する氣持で拜み合ふことが出来たならば、誰も——手を合せて拜むばかりが何も拜むのぢやない。心持でその人と互に握手する氣持が出来ましたならば、商賣の上にも、何の上にも人間を朗かにする、つまりもてる氣持といふ位人生に於て、私共平凡な人間に取つて力を附けることはないであります。誠意といふものがなければ——毎日御商賣で皆様御存知でせうが、誠意が大切か、愛想が大切かと言へば、どんなに不愛想でも、誠意のある店は必ず繁昌すると思ふのであります。こゝまで考へて見ますと、勿論商略も宣傳も商賣のコツもあるでせうが、一體どんな風になれば客の機嫌が旨く取れるかといふ考も本當の商賣ぢやない——商賣の方は私はよく存じませんが、商賣哲學は知りませんが、最後は何かといふと、これは「盲者蛇に應せず」と叱られるかも知れませんが、お客の機嫌を取つてばかりゐては本當の商賣ぢやない。良い品物を安く賣つて、これ程親切にしてもお客が買はんならば、それはお客が勝手にせよといふ氣持がある時に、どれ程商賣が強いであらうと思ふのであります。

或る藝人が——名を申しますと、皆様も御存知の人であります。「お客様のことなどを考へて歌つたりしては氣が揉めてしようがない。向ふには若い女、こつちには婆さん、爺さんが居る、あのお婆さんの氣に合せようとすると、こつちの若い女の人の氣に入らない、向ふの若い女の人の氣に入らせようとすると、こつちの老人に氣に合はない、一體どんな風にしたらよいかと考へて居つては、どんな節廻しをしても駄目です。そこでお客様には申譯がないが、假りに御客様を南瓜畑に竝んで居る南瓜と思つて、この拙き藝を唯だ眞心で神や佛に献げる氣持で歌ひ出す。」と言つて居りましたが、お客様を南瓜といふことは甚だ怪しからんことであります。商賣道の

私が眼の中に埃が入つて、大變痛んで兩眼が潰れる、そこで眼科醫のところに行つて「どうぞ早く癒して下さい。」そこで醫者が「お前の財産を半分呉れるならば癒してやらう。」と言つたとする。この眼が潰れるかどうかといふのだから、財産を「上げます。」と言ふ。その時幾ら財産を有つて居るか、千圓しか持つて居らないとすれば、この眼は五百圓の値打しかない。私が若し百萬圓有つてゐるとするとそれは五十萬圓の値打になる。斯ういふ次第で、私が有つて居る人格の高い深いに依つて、眼と同じに價値が違ふ。

貧乏の家の一人の青年、二十幾つといふ若者が、親兄弟のために自分を犠牲にして働く、妹や弟が「見さんが汗水流して働いて来たお金であるから、一錢も粗末に使へない。」といふ時に、金持のどら息子が十圓、二十圓を屁とも思はず使ふといふこともある。たつた一錢でも、涙含んだ、御光を放つて居る金もある。人生はいろ／＼であります。

私共は山に行つた時に道がある。その道は何百年も前の名も知れない先祖がそこに道を付けて下さつた爲に、私共が今山を歩くことが出来る。一粒の米も農家の粒々辛苦の結晶であり、またそれを炊ぐ人があつて喰べられるので、皆人様の勞力の御蔭である。「勿體なや晝寝して聞く田植かな」もさうした感じを表はしたものであります。そこで私も何か死ぬまでの間に貢献をして行きたい、斯ういふ感じの中から人生の味を見たい。世の中には働くことを苦勞だと考へる人がありますが、成べくこの勞働を藝術化し、信仰化し面白くして行きたいと思ひます。

舜戒尼といふ放火をした尼さんが、宮津の刑務所に入つた。初めは「世の中が悪いから犯罪人になつた。」と言つて居りましたが、毎日々々羽織の紐を編んで居りましたが、「業は勤むるに精しく怠るに荒む」といふ韓退之の言葉があります、段々その仕事面白くなつて来て一生懸命やつて居る。藝術化したのです。それからたうと

うこの人が羽織の紐を編む毎に「どうかこの紐をつける天下の不良の娘さんをして、南無大慈大悲觀世音菩薩、良い娘さんにならしめ給へ、南無觀世音菩薩」と言ふやうになつたといふことを、舜戒尼の物語の中で讀みました。信仰化したのであります。獨樂も廻つて居る間は立つてゐて倒れません。

田舎の停車場に行つて——東京と違ひますから——一汽車乗り遅れると、二時間も三時間も待たなければならぬ。

「今日は汽車に乗遅れたので何んにもすることがないし、こんな嬉しいことはない。」と考へるものがありませうか、「汽車に乗遅れてこんな馬鹿氣たことはない。」と考へると思ひます。人生に勤勉努力がなかつたならば、人生は無聊で怠惰で殺風景であると考へます。針は使はないと錆びる。水は流れないと腐るのであります。

以上甚だ未熟のお話でありましたけれども、正直で、利口で、出来るだけ親切に——出来るだけといふ言葉は入れたくないのですけれども、そんなことを言つても本當にやれるかといふとやれません。但し勤勉は出来る。この四つは私が平生考へて居りますことで、それを今日間に合せにお話した次第であります。御清聴を煩はしたことを感謝いたします。(拍手)



動物供養の法話

増上寺法主 大島徹水師

九月十五日於増上寺中村屋の法要

増上寺法主大島徹水師は當代稀にみる高僧として宗教界に隠れもないが、師が校長をして居る京都の家政女学校改革に際し、少しも懇顔がましき事なかつたにも係らず、淨財忽ち百萬圓を突破した。而かも寄附者に對して受取り一つ出さずに、「老衲に無條件で下さるならば有難く頂戴しよう」と濟まされるあたり、以て師の風格と信者の間に於ける信用が偲ばれよう。

故渡邊海旭師を無二の親友とした老師は、妻帯せず、飲酒せず喫煙せず、生喫を口にせず、戒律を守つて六十年の生涯を只管佛道に捧げ、精進を續けられてゐる。當今口先ばかりの學僧の多き中に、師の擡まざる『行』の力は特に尊く光つてゐる(相馬愛蔵附記)

小傳 明治四年尾張國知多郡大府村に生る。十二歳にて碧海郡貞照院に弟子入りし、三宅戒輪師に學び、亦志運律師の薫陶を受け、廿一歳名古屋愛知支校に入學し、次に上京小石川本校(大正大學前身)に學び、三十一歳京都鹿ヶ谷の高等學院に天台部を専攻し、三十五歳東山中學に教鞭を執り、大正元年家政女學校に主幹となりて、二十有餘年今日に到る、大正三年江州の阿彌陀寺に住職となり、昭和三年安土の淨嚴院住職に轉し昭和九年十一月八日推されて増上寺法主となる。

今日皆さんはあなた方の店に於て所謂商賣の上よりして、或はその他のことで亡くなつた生物の供養をしたい、斯ういふので茲にこの意義深い法要を營みになるのでありますが、これは佛教の上から申しますと、人間始め生

を保つて居る所のものは皆同等であつて、その自分の作つた所の業に依つて、或は人と生れ、又は異類と申しまして下等動物のやうな生を享けたといふのが、これが佛の教へであります。又人と生れてもそれ／＼皆自分の宿業に依つて、或は男に生れ、或は女、或は商人、色々なそれ／＼のものがありますが、佛教では自業自得、總て自分の業に依つて自分が得たものであつて、決して他に依つて制せられることはないといふのが、これが佛教因果の法則であります。それですから佛教の上で志の深い方々は、さういふ下等の動物の命を取るといふことに付ては、憐れみを以て供養し、それを唯自分だけではない。人にも勧める。私が育ちました三河の國の田舎に於ては彼岸中日、之を殺生禁斷の日としてゐます、百姓は自分の耕作を害する害蟲といふものの命を奪るから、それで秋の彼岸には寺に詣るのであります。さうしてその害蟲等の、通常稱する蟲供養を營むのであります。そこで皆さんも因縁あつて、この中村屋に於かれて、皆さんの將來の爲にお働きになり、店の爲にお働きになるのである。總て人は心得が大切で、唯仕方なしに働く、何となしにこゝへ來たから働くといふのと、因縁あつて働くといふ心得があつて働くといふのでは大變な差別がある。その人の人格といふものはその心得に依つて上下の別が生じて來るのであります。

本日は何か皆さんにそれに就いてお話をしようと思つて居りました。そしてかうやつてお目にかゝつて見ると皆さん多く若い方々でありますから、自分が小さい時から心に止つて居る話で、少し時は隔ちますけれども、丁度あなた方のやうに店に働いて居つた人で大變よいことをした人の話があるので、それを皆さんにお話したいと思ふのであります。それは外ではない。中には御承知の方があるかも知れませぬが、岐阜縣の竹が鼻村、あそこに佛佐吉といふ渾名の人がありました。この佛佐吉氏はどういふ人であつたかと申しますと、最早この人が亡くなつてから百年以上にもなりますが、この竹が鼻といふところは今にして外の町と違つて道路が綺麗です。さう

してこの人の生立、傳記を読んで志を立て、今立派に立身出世して居る人がある。尙ほ自分の師匠の志運律師も佛佐吉の話をよく私共小僧にしまして、お前等は僧侶になつたのであるから、せめてはこの人に劣らぬやうな心掛で居つて呉れと言つて時々誡められた。それでよく自分の心にはこの佛佐吉のことを思出しますから、少し搔摘んでお話ししたいと思います。

佛佐吉は不幸な人で、小さい時に、七八歳の頃であります。その頃に父親に別れ、家はといふと赤貧洗ふが如き有様であつたのであります。然るにこの母親は洵にしつかりした人で、この子を岐阜から名古屋に奉公に遣りました。その時に母親がどう言うて別れたかと申しますと、母親は自分の子に向つて、お前はこれから私の許を辭して、名古屋に奉公する。立派に主家に仕へて一人前として恥しくない人となつて呉れるならば、私はお前を喜んでこの家に迎へてやる。併し自分自身の我儘やその他の事故に依つて、向ふ様からお暇の出るやうなことで家に歸つたならば、私はお前には會はないといふことの約束で、佐吉は母親に別れて家を出たのであります。偕て名古屋に参りまして、或店に仕へましたが、何しろさう母親から戒められたから正直に働き、何事も正直にしました。此の正直の爲に却てその店の人達に憎まれてその店に勤められぬやうな事になつたのであります。誓つて自分は店の爲に働いて居る。所がその家は減びる時になつて居つた。どんな立派な家でも、その家族なり、その家に働いて居る人なりに、うまいことを言ふ者があつてはどんな立派な店でも減びる。この店もさうでありまして、多く働いて居つた人達が眞實心がなかつたやうでありますから、佐吉の正直が邪魔になつた、それで佐吉を逐出さうとして居つた。或時佐吉は名古屋の今の停車場の西の方に使ひに行きました。すると田舎の人が名古屋の町に來て道が分らないで迷つて居つた。その人に道を聞かれた。それを憐れに思つて、道案内をしてやつた爲に大變店に還ることが遅くなつた。それで他の人達は佐吉に何かの落ち度のあれかしと思つて居つた時であるから、

遂に外の者が今日で謂へばストライキを始めた。内緒で手間取つて歸りを遊んで来るやうなものでは困るから、どうか佐吉を出して呉れ、出さなかつたら私共は罷めるといふことになつて、佐吉はその店を辭させられた。まだ十五にもならぬ一年経つた位の所で家に歸つて來ました。考へて見ると逐出された。所謂學校で言つたら退校されて來たのであるから、母親に會はず顔がない。それで家の裏に廻つて、よう表から入りもしないで裏の方で一人立つて、悲しかつたか泣いて居つた。その聲を聞いて母親がどうしたのかと言ふと、泣く泣く物語つた。流石に母親も、それはお前は正直にして悪く言はれたのであるから、それならば已むを得ぬと言はれて、家に入れてもらふことが出來たさうであります。偕て翌日から遊んで居るといふことはならない。これからどういふ仕事をしようか、子供のことであり、家に元手といふものがない。已むを得ず綿買ひを始めた。始めるといつても綿を買ふのに秤がない。秤を買ふお金がなかつたといふのであります。それでどうして綿買ひを始めたかといふと、よその家に行つて、私はこれから綿買ひを始めた、どうか憐れんで賣つてくれといふてお願いした。秤がないから、綿を賣つてくれる其の家でこれは二百目、私の家のは三百目あると言はれる通りに買つて、さうして向ふに持つて行つて、斯ういふて買つて來ましたといふて買つてもらふ。斯う言ふ風に秤なしに綿買ひをやつた。それで立派に通つた。人間は妙なもので、所謂正直の頭に神宿ると申しますが、一年か経ちますと相當儲かつた。自分の豫期したより儲かつたものですから、斯うして儲かつたのは皆さんが同情して呉れた結果であるから、この金を家のものにするのは甚だどうも身勝手であるといふので、お母さんに相談した、岐阜は非常に出水の多い所で、もう大雨が降つたなどといふと直ぐ水が出る。それですから河に割合に橋がなかつた。それでお母さんと相談してこの儲かつたお金で以て橋を架けた。さうすると村の者が喜んで、あんな子供が秤もなしにやつて、さうして橋を架けた。これは村中でお禮に行かなければならぬといふので、お禮に行つた。そしてこの橋の名を佐吉

橋としてお禮にしようと言つたけれども、佐吉は私の名前など附けて貰つては困る。あなた方のお蔭でこれが出たのであるから、と言つて強いて断つた。

それから金は相當儲かつたから、自分も勤めて居た名古屋の店へ訪ねて行つたが、最早十年も経つてその店はなくなつて居る。そこへ知つて居る人が来て、あなたが出てから暫くしてこの家は潰れた。今は裏店に住んで居る。斯ういふ風に聞かせて呉れた。それで昔の主人を訪ねて、その人に復興の出来るやうにと元手を置いて来た。

もう一つ感心なことは、或時に綿を買つて金が相當出来た。それで昔は、自分達もよくやりましたが、金を落さぬやうに腹巻に入れて居た。その日は勘定の目ですから、お金が澤山あつたので、腹に巻いて河を渡つて行つた。すると河を渡ると直ぐに昔で言ふ追割が出て来た。「おい小僧、お前金を渡せ」さう言ふた。金を奪はうとする。すると佐吉は少しも驚かず、その追割を見ると立派な身体です。直ぐに佐吉は、あんたは私の金が欲しいといふなら上げます。決して私は金を惜しみませぬ。上げますが、併し上げるに付ては私の望みを一つ聞いて下さい。それはどういふことかと言ふて追割が問ふと、私はまだこんな若い子僧あがりです。あなたは私より齢も上であれば、身体もそんなに立派なのに、人のものを奪らなければ生活が出来ぬ、そんな憐れな心になつて居る。私の金は上げますが、どうかあなたも、恐らくあなたはなまかわをして、さういふ人の物を奪つて生活しようといふのでせうから、この金は惜しくないから皆あなたに上げますが、その代りどうかあんたも自分の本心に歸り、立派な身体を持つてゐるのだし——親もあなたを育てて追割にしようと思はれたのではありますまい。どうか親の志と私の望みを入れて、どうか立派に生活するやうになつて下さい。これがあんたに對する望みだから皆上げると言ふて自分の持つて居る金は皆やつた。それで母親にそのことを言ふた。すると後にこれがお禮に來た。佐吉

の家にお禮に來た。そして、あの時金を貰つたが、さああなたのあの時に言はれた言葉をよく考へてみて洵に恥しいことであると思つた、私はそれから眞面目に働きました。そしてこの男は立派な人間になつて、お禮に來たのであります。凡てこの佐吉といふ人はさういふ行ひをした人であり、無論之に似た話はまだ大分あります。兎に角世の中は心得が違ふとこの追割のやうになる。皆さん若い方々は心得を違へぬやうにして貰ひたいと思ふのであります。さうしてその後——話は少しく長くなりますが、先程話した道路の綺麗なことですが、この人は何時でも自分の働けるだけ働いて、さうして夜遅く歸つて来る。所が自分の村に入つて見ると町が非常に汚れて居る。それで朝早く起きて町を掃除した。それで外の人達が、あの佐吉さんは人よりも一人前以上に働いて、遅く歸つて来て、さうしてまだ自分等が寝て居る中に起きて町を掃除して歩く。あの人に掃除して貰つては濟まぬといふので、町の者が早く起きて掃除をするやうになつた。そのよい働きが百年後の今日もまだ残つて居つて、いつでもこの町は綺麗に掃除が出来て居る。これは實地に見て來た人の話です。

この佛佐吉が江戸へ、金佛さんを注文した。所が昔のことであり、江戸から船に積んで遠州灘を通つて参りますうちに、難船して佛様が船と一緒に沈んでしまつた。この報らせを聞いた時に、佐吉は斯ういふことを言つた。難船して佛様は海に沈んでしまはれたが、船頭やその外の人の命に別状なくて何よりだ。佛様は海に沈まれたが、それで海のものらが佛様に觸れる。却つて佛様と魚の因縁を結んで下さるから洵に結構であつたと言ふて少しも悔やまず喜んだ。佐吉はかういふ風に心の廣いものであつた。人を救ふといふことは割合氣が付きませんが、魚までもといふことは一寸ほかの者には思ひもつかぬことであります。然るにこの佐吉氏は自分の修養からこの言葉を吐いたのであつて洵に偉いことであります。さうして尙ほ苦心して二度目に作つたその佛様が今に竹が鼻にあるといふのです。又佛様を金佛にしたといふことも、餘程この人は考へて居る。金の佛様にして外

の廣つばに置けば、人がわざ／＼家の中に行かないでも、仕事の序に朝一寸そこを通つて拜むことが出来る。野良働きをする百姓のことでありますから參詣するといつて、本堂だとか何かにわざ／＼行けないのであります。それが廣つばに祀つてありますから一寸拜んで行く。その考で金の佛様を作つたのです。さういふ風にして、八十幾つで亡くなつたさうであります。生涯の佐吉の仕事は唯自分の身を捨て、さうして多くの人の爲になるやうにといふことであります。

もう一つこのお母さんが大變心掛の良い人でありまして、佐吉は外に出て行商して居る。お母さんは家で餅を搗いて賣つて居る。大變流行つたが、或時佐吉が言ふには、餅は隣の店より小さくして賣りなさい。お母さんが、お前、これでも相當の利益があるのに之を小さくして餘計儲けようといふのは心得が違ふと言ふた、いや、さうぢやありませんね、私の店のお餅が大きいから向ふの店が賣れぬ。向ふの店もよく賣れるやうにしたい、私の店も小さくして賣ると向ふの店も賣れると思ひます。お互に商賣は助け合が大事だから、と言ふたさうであります。斯ういふやうに凡てこの人のすることが綺麗であつたといふことは小さい時の母親の戒めの賜物であります。それで私は若い時に母親なり、或は年寄の方のお話をよく聞いて、それを眞面目に守る。自分のことをいふて済ませぬが、私は今日六十以上の年になりますまで、色々な人に東京でも——東京はまだつきあひが狭うございませぬが、京都は久しいから色々な方に會ひました。一番よく會ひましたのは大學の先生、それから實業家、色々な方に會ひましたが、私の會つた相手は皆、どの先生でも一寸日本でもやかましい先生ですが、其中で師範學校を卒業して立派になつたといふやうな方、或は中學しか卒業しなかつたといふやうな方、さういふ方々が立派に大學教授となつて居る。此等の人は皆若い時には散々苦勞して、所謂苦學した人達でした。それで私は思ひます。若い人が苦學する、若い人が難儀する——その難儀していちけるやうな根性では到底人間は一人前になることは出来ない、どこ迄も自分の境遇といふものは自分に與へられたもの、それを彼是れいちけるやうな根性、或は他を嫉むやうな根性で彼是れ自分の心を惱ますやうでは立派な人になることは出来ない。どうか皆さんは自分に與へられた境遇といふものを大切に、自分の身を修めるやうにして戴きたい。私は今日のやうな法要は東京では珍しいと思つて居る。茲にかういふ供養をなされるといふことは洵に結構なことと思ひまして、子供の時に聞かされた話を思ひ出した。それで皆さんに一寸お話ししました次第であります。

今日はこゝで皆さん大勢で混雜致しますから、こちらから順々に焼香して貰ひまして、焼香が済みましたら、當山山門の上に十六羅漢を祀つてある、今日は幸にして拜觀出來ますから、それを拜みまして、それから寶物殿、この中にこの寺の最も大切な五百羅漢——あんな方多いやうでも二百人ばかり、この二倍半。この五百羅漢といふのは昔狩野一信といふ人があつてどうかして五百羅漢を書きたいと思ふて居つた、けれども家貧にしてどうすることも出来なかつた。所がそれではその費用を助けて上げようといふ人がありまして、一信は一身を捨て、十二年掛つて、而も終ひには自分にもう書けなくなつて、弟子が手傳つてこの五百羅漢を書いたといふことでもあります。この方の御堂があつたにありまして、羅漢堂といふて紀念してあるのであります。繪の上手下手といふことは兎に角、身血を注いで、一身を捨てて書いたといふことが窺はれるのであります。而してその家内も感心な人で、主人亡き後は自分も尼僧になつたさうであります。尚ほ外にも色々な寶物がありまして、拜觀して戴きたいと思ひます。少し長くなりましたが、これで私の話を終ります。——合掌——



主人學の修業

相馬 愛藏

(昭和十一年十月七日、金鷺會館にて
協同會主催、埼玉縣工場主修業會講演)

唯今御紹介に與りました相馬愛藏であります。私は菓子屋でありますから、菓子の製造販賣等に就きましたは、少しは経験致して居りますが、今日のこのお集りはそれと全く異ひまして、工場經營をなされてゐる皆様方に對し、何をお話致せば宜しいか、到底その資格はございませんので、實は固く辭退致したのでありますが、何でもよいから話せとの強てのお望みでありましたので、伺ひましたやうな次第であります。先づ私自身常に痛感して居りますところの、主人學の修業といふことに就いて、お聞きを願ふことに致さうと存じます。

私の處の菓子職人に致しましたが、一人前の腕前になるには少くも十年の修業を要します。足袋職なども七年位は苦勞せねばならぬと聞いて居ります。亦少しく高級なところで見ましても、彼の外國航路の船の船長となるには、商船學校を卒業して更に十年位實地の練習を必要と致します。何でも一つの事を爲すには、皆斯様にそれ相當の修業を要しますのに、獨り商店の主人となる修業といふものだけは聞かないのであります。工場主に於いても店主の場合と似て居りまして、専門の知識を要することは別でありませうが、單に一工場の主人としての

修業は問題とされてゐないやうに見受けられますが、これは如何なものでありませうか。

支那では、昔から帝王學といふものがありまして、帝王の位に上られる御方は、特別な修養を必要とされ、必ずこの帝王學を學ばれることになつて居りました。

我が日本に於きましても、畏くも天皇の御位に登らせられる皇太子様は、同じく帝王學を修めさせられ、常に御徳を磨かせられると承ります。

ところが世上一般に於ては、人の下に働くものゝ心得はよく教へられ、またその修養を怠らぬ人も少くないのであります。人の上に立つものゝ心得を教へるといふことは極めて稀で、多くはその必要を氣付かずに、たゞ資本さへあれば、誰でもすぐに主人になれる様に考へてゐると見らるゝのであります。しかもこの主人たるの修業はなかなか容易なことではありません。これを等閑にしてゐては、人の上に立ち、人を率ゐて行くことは出来ないのであります。何を致すにも主人自ら先づ大いに學ばねばならぬのであります。

總じて成功した工場や商店を見ますに、それ等は殆んど例外なく、自然にこの主人學を體得した人々によつて指導せられた結果であることを發見致します。ところがその子孫の代になりました家運衰へ、遂には破産に陥る例が、世には珍らしくないのであります。これ等はその子孫の多くが不肖にして、主人學を知らず、従つて主人らしく行はずしてかへつて其反對の事をした結果なのであります。早く言へば苦勞知らずの我儘者が主人になつたからであります。

主人學の眞髓は「部下の心を得ること」であります。昔北條早雲が、兵學者に書を講ぜしめて居りましたが、「主將の要は部下の心を得るに在り」といふところになります。「それなれば我は最早學ぶに及ばず」と言つて、その講義を中止せしめたといふことであります。早雲は、伊豆の一角より身を起して、よく關八州を領有し、北

條氏の基礎を築いた名将であります。

工場主、商店主は勿論、技師長、職長その他何によらず人の上に立つものは、皆々この早雲と同様に、部下の心を得るのではなくては、眞の成功は覺束ないのであります。ではどうすれば部下の心を得られるかと申しますと、第一に

「部下の働きに感謝すること」

であります。工場でも商店でも多勢の人がよく働いてくれてこそ成立つてゐるのであるといふ心持さへあらば自づとその働きに對して感謝の念をおぼえ、従つて部下を愛することになるのであります。するとまた部下の方でも喜んで働き、決して骨惜しみなどいふことはないものであります。

これに反し、主人の方で、月給を拂ふから働くのだといふ頭でゐるとすると、働くのは當然だ、いやまだく働きが足りない、もつともつと隙なく働くべきだとなつて、部下の働きを相當に認めることが出来なくなるのであります。さうなれば部下も反抗心を起して、何だ雀の涙ほどの小遣ひしか出さないで、そんなに働いて堪るものかといふ氣になつて、自然横着をきめざるを得ないのであります。

お互ひにそんな風になつてしまつたら大變で、どちらも自然に發露する感謝の念によつて扶け合ひ、主人はどこまでも誠實に部下を率ゐて、はじめて仕事が順調に運ぶのであります。第二は

「部下に對して飽くまで公平であること」

であります。

多勢の者を使ふのに分け隔てがあつてはならない、誰に對しても公平でありたいとは、誰でも思ふことでありますが、實際に當つて見ると、これ位むつかしいことはありません。早い話が自分の生んだ子供でさへ、多勢あれ

ばこれを平等に愛するのは容易ではありません。長男はグツでいかん、次男は反抗的で困り者だ、三男だけはよく言ふことを聞き、才能もあるやうだとすると、ついこの三男を偏愛する。といふやうな實例は何處の家にもあり勝ちであります。

同じ血を分けた子供に對してさへさうなのですから、まして多くの使用人の中には、無愛嬌で觸りのわるい者もあれば、働きの割に結果の上らないやうな損な生れの者もあり、また如才なくて、かゆい處へ手の届くやうな者もあります。虫の好く好かんといふこともあり、つい一方を重く用ひ、一方を疎かにする弊に陥りかねないのであります。ところが事實はどうかといふと、無愛想でこつこつしてゐるやうな人間の方が仕事に忠實であつて、要領の宜しい才物は往々にして横着者であります。

それ故、主人は根本的に人を見るの明が必要であると共に、眞に一視同仁でなくてはならないのであります。が、これがなか／＼困難なことで、決して口で言ふやうにはまゐりません。平常人事を行ふに充分公平を期してゐるつもりでも、その結果は、どうやら公平に近いといふ程度に止まるのであります。

それでもまだ主人が直き／＼に行へば、先づ／＼大きな間違ひはなしとしまして、もしこれを番頭まかせ、支配人まかせに致しましたら、人事の公平は忽ち破れ、大いに得意な者が出来ると共に、ひそかに面白からず思ふ者が出来てまゐりまして、その結果、集團生活に最も大切な協力一致が失はれるのであります。主人ですら完全を期し難いものが、番頭や支配人に行ひ易からう筈はないのであります。そこには幾多の感情が混り、自づと自分に都合宜しい者を重用して、然らざる者を疎外する結果となるのは致し方ないことであります。大きくは國家の上に見ましても、一國の君主にありては民を盡く一視同仁、平等に愛されるのであります。降つて大臣となりますと相當人格者であつても、自分を推擧し、自分を支持してくれるところの一黨一派を重用して、反對

黨を疎外せざるを得ないのであります。先づさういふわけでありまして、部下の進退任免の如き大切な事は、主人たる者の役目として、如何なる時にも自らこれに當らなくてはなりません。また支配人や番頭任せにしてならないばかりでなく、世情に疎い妻女や倅等の感情や私見に左右されることのないやう、大いに警戒すべきであります。

第三には

「主人と部下との利害の一致」を必要とします。昨今のやうに、軍需品工業が大いに好況で、それ等の工場では相當大きな利益の上る時でも、一方にはまだ多くの失業者があつて、働く人を安く雇ふことが出来るために、部下の待遇を少しも改善せず、益々主人のみ利益をあげて行く、といふやうなところもあるやうですが、さういふやり方は決して部下の心を得るものではないのであります。我々菓子屋の方にもそれがありません。日本菓子の職人といふと、到底生活して行けさうもない薄給しか與へられない習慣になつてをります。もとより主人側は好都合でありますから、相當利益のある店でも、この昔からの習慣を改めないものであります。職人はそれではくらしで行かれませんから、止むを得ず砂糖や玉子、また製品などを私かに持出したり、或ひは原料問屋から心付を強請したりするのであります。主人も勿論これは感じてゐまして、それ故尙更増給といふことを致しません。品物をぬかされるのを寧ろはじめから見込んでおくのであります。これでは職人も、悪いとは思ひながらも、益々盗み出しの必要を感じるといふことになりす。無論斯様な對立的の態度でありますから、仕事の成績は宜しくなる筈はありません。

之の事情に關して少々手前味噌の様に聞えますが、私が實地経験致しましたことを御参考に申し上げます。私の處は最初パン屋でありましたので、今日でも中村パン店と呼ぶ方が少くないのであります。パン一種の製造のみでは、夏は非常に忙しくありますが、冬になると閑ま過ぎて困りました處より、何か冬賣れるものをと物色しまして、日本菓子併せて製造販賣致さうと思ひ立ち、之を初めましたのが今より三十年前であります。偕て菓子職人を雇入れて見ますと、以上申せし如き悪習慣が極めて多いので何とか改良すべきだと考へまして、當時東京で第一流店の主人に話し、職人の給金を増して、盗みぐせを止めさせるやうにしてはと相談しましたところ、その主人の答には、彼等の盗みぐせは、菓子職人社會の何百年來の習慣であつて、今更さういふことをして見たところで改まるものではない。矢張りその盗み分を凡そ見積つて、それだけ給金を少くするより外ありません、といふことでありました。

しかし私にはそんな無情なことは出来ませんので、給金を倍にしまして、尙また子供のある者には子供手当、老人があれば養老手当を添へる等と心を配りまして、また特に忙しくて利益が多かつた時は、これを分配するやうに致しましたところ、彼等も生活の安定を得ると共に長年の慣習の悪しきを悟りまして、その物品の持出のことも、またコンミツションを取るなどのことは全く根絶致しまして、その上製造能率も非常に増加致しました。従來の職人一日の製造高は十圓乃至二十圓で、平均して十四五圓見當でありましたのに、私の處では現在平均四十四五圓になつて居ります。即ち三倍の成績をあげてゐるのであります。待遇改善から自然にこの好成绩が齎されたのだと私は確信するのであります。

今日大會社や官廳に於て、仕事の能率が頗る低く、大體一般民間のそれに比して、三分の一位の働きより出来てゐないと申しますが、もしも上に立つ人々に部下を思ふの眞實があつて、この邊の注意がよく行はれましたならば、左様な状態に止まることはなからうと思はれるのであります。大會社等で所謂上に立つ人々は、單に大株主とか大財閥の關係者といふだけで、幾つかの會社の重役を兼ね、自動車を乗り廻してゐるだけで、毎月數千圓

もの収入があるのでありますが、それに反し、眞に力量あり活動力ある秀才が、僅々六七十圓の俸給に甘んじてゐなくてはならぬのであります。妻子をも養ひ兼ねる有様では、不平不満、眞剣な働きの出来ないのは、當然のことと言はねばなりません。先頃、米國の視察を終へて歸朝されました藤原銀次郎氏の談にも、日本の會社は米國のそれ等の會社に比し三倍の人を使つてゐると語られて居りましたが、それなら米國人は日本人の三倍の能力があるかといふと、決してさうではありません。カリフォルニアに働く日本人の能率は遙かに米國人を凌ぐと申しますし、その他に見ても日本人は米國人より決して能率の劣る國民ではないのであります。要するに仕方さへ宜しければ少くも今より三倍位の能力を發揮し得る人々を、現在は指導宜しきを得ず、また根本の不滿を除くことをせぬために、かく面白からぬ状態に於てゐるのであります。上に立つ人々の修業の不足は、實に斯くの如く大きな不幸を、一般社會に及すものと考へらるゝのであります。大きさに於てこそ違へ、一工場、一商店、の主人も、その責任は同じことでありまして、私は事にふれては自己の修養の不足を思ひ、主人學の修業の必要をいよく痛感するのであります。主人自ら主人學の修業が出来て、はじめてそこで部下を善導し、有用の材に仕立てることが出来るのであります。主人は主人であると共に彼等の教育者、また親代りであることを忘れてはならないと思ふのであります。

以上で大體主人學の一般を盡したかと思ひますが、最後に尙一つ重要な問題が残つて居ります。それは妻君と協力の問題であります。我々個人の工場や商店にあつては、その妻君の地位は、多くは主人に匹敵し、稀には主人以上に主要な場合さへあります。今日の大三井の基を築いた人は初代の夫人であつて、これはもう知らぬ人もありませんが、彼の盛大な明電舎も、當主の母君の力で彼の盛運を開かれたものであると聞きます、また味の素の鈴木氏の今日の隆盛の源にも、當主のお祖母様の力が大いに加はつてゐると申します。我々菓子屋の同業中

に見ましても、銀座木村屋の主婦、本郷三丁目岡野の主婦、本所壽徳庵のおばあさんなど、みな主人以上に店の繁榮に力あつたものであります。婦人は勤勉で、細心で、注意深く、政治とか相場とかいふ道樂もまづありませんから、賢明なる主婦は、往々にして主人以上の働きをする場合があるのであります。

然しながら、さういふ賢明な婦人は別として、一般の婦人は天性つゞまやかであるため、それが一つの缺點になつてゐる場合が少くないのであります。私の知つて居ります某大學教授の夫人は、某會社の重役の娘に生れて、最高の教育を受けた人でありまして、どういふものか女中等に食物のことを考へてやらないのであります。女中等は仕方がないので、主人夫婦の喰ひ残したもので食事をしてゐるといふ有様で、これなども、どうせ残るのだからそれを喰つておけばよいのだといふ考へなのか、何んとしても恥しい話ではありませんか。又相當の店や工場の店員や職人が「おかみさんがケチで食物がわるい」とこぼしてゐるのも、よく聞くところでありまして、粗食の結果、成長期にある少年をして發育不良に陥らしめたり、病氣をする者が多いなどいふ例も少くないのであります。

これでは如何に主人學を修業して完全たらんとしたところで何もならない、妻君が傍から破壊して行くのであります。又商賣見習に來た小僧に子守のみをさせたり、また我儘な子供の相手をさせるのもこれ等の妻君でありまして、子供もこれでは愈々増長し、店員達を自分の家來のやうに思ふて無理な事などいひつけるやうになり、どちらに對しても宜しからぬ結果を來すのであります。

故に、主人は部下を指導すると同時に、その妻女を教育することが大切でありまして、夫妻同一線上に立つて協力一致して當るのでなくては、多くの店員や職工等を完全に率ゐることは出来ないであります。なんの妻君教育位と考へますが、實際に於てこれはなかなか、難しいことでもあります。彼の英傑秀吉すら淀君の我儘を押へる

勝れた価値を持つことはいふまでもない。自己の理想を美と力とに求めたむきに眞理を遂ひ、時に五人の愛子を前後して喪ひ、身は重患に罹つても尙ひらむことなく、一店に戦場のごさいます、店に立つ時は戦士であります」と良人相馬愛蔵氏と協力して今日の中村屋を興した著者の現実と理想に對する意力の強さ、生に對する熱情、来るものは拒まずの寛容は、いづれも女性には珍しいばかりでなく、男子も及ばぬ自由人の強さを持つものではなからうか。(葉山良子氏)

◇サンデー毎日評 若き日の著者自身を中心として、著名な男性女性の裏面を素朴な筆で精細に描き出したところの得難き記録であり、従つて明治文學研究者に取つて誠に好個の參考資料ともいふことができる。

ムキな情熱とである。それ故に女史の苦惱も多かつたやうであるが、それ等に打撃つて今日に到つてゐられるのは、何と云つても敬服に堪へない所である。女史の如きは全く今日の婦人の中で珍しい、他に比較する人のない存在だといつて差支あるまい。(市川房枝氏)

◇女性時代評 著者黒光女史とは私は殆ど二十年來の知己であり、いつでも尊敬と親愛の情を持つて接してはゐたが、「黙移」を通じて見る黒光女史は、その生活の根が私達の想像してゐたよりは一層深く、廣く、時代の地層の中に張つてゐることを知つて、一段の敬意を感じさせられた。

◇女性展望評 此の書を讀了して、私が最も感じたのは、黒光女史を初め、明治時代の婦人達のえらさといつた事であつた。黒光女史は本書でその生立ちから今日にいたる迄を辛直に、或場合辛直過ぎる程に叙述してゐられるが、その凡てを貫いてみられるのは、個性の強さとヒタ

「黙移」は女史が説話體で自分の生活して來た時代、その中で得て來た自己の心境を靜かに人に語るといふ様式であるが、その平易な落ちついた言葉の中に、著者の實感が、時としては紙面からどり出して、讀者の心臓に直接に訴へて來るものがある。この激動的な過去半世紀の日本女性の歴史、文學の側面史を、何うしてこのやうな平明な言葉で語り得たかを窺ふほどである。こゝにこそ著者の

て、野間清治君や増田義一君の身の上話に劣らぬ經歷をもつてゐる。

◇婦人文藝評 世に文學に志す婦人は多數あると思ひます。しかし、それらの全部が作家として成功して行くことが出来るかといへば、それは疑はしいと思ひます。しかし才能や環境によつて作家としての道を阻まれることがあつても、藝術なり文學なりを愛することによつて受ける利益は少しも損はれることはないと思ひます。即ちそれは教養の問題であり、この教養が實生活の上で人間の上に與へる影響はどんなに美しいものであるかといふことを、相馬女史の本を見ながら考へさせられてゐたのでした。(神近市子)

◇明日香評 「黙移」の特徴は筆者が女性であるだけに觀察が細かく、材料が丹念に集められてゐる事と、その觀點が偏つてゐないといふ事である。恐らく時が反省といふ節をかけたからであらうか。殊に、明治女學校の先輩同志の印象、紫琴女史の思出は興味深かつた。著者の嚴本善治觀、明治女學校觀は深い感動を私に與へた。(鹽田良平氏)

◇新潮評 最近約四百五十頁を一氣に異様な魅力と感動で讀み終つたのは「黙移」と題する自傳。著者は相馬黒光——新宿中村屋の女主人、若い日の彼女は獨歩の詩のなかにも姿を現はしてゐる。獨歩の信子の從姉にあたる人、六十の齡と思はれぬ宗教的ないぶしのかかつた情熱にみちた筆致で、半世紀にわたる彼女の周圍に交渉をもつた人たちの姿が描かれてゐる。(福川清人氏)

◇女性の光評 かつて、同期の女性達が情界の花と咲き散つたのに比べると、女史の一代は、女ながらも櫻の木やうである。信實に富み、繁りふかく、多くのものをその木かげにいこはせて、夏空に青々とその葉みをつづけて行く。(中略)それにしても考へ知る事の出来るのは、人間一代、次々におそひかゝる苦痛、困難はそれを受けるものゝ力(信仰を主と

◇隣人之友評 近頃最も讀みばえのある出版の一つといふことが出来る。相馬黒光女史は近代の新しい女の大先達ともいふべき人で、然もその後の新しい女のやうに輕薄味がなく、立派な志士仁人の備がある人、其の自叙傳であつて、自身の生涯が多趣多方面であるのみならず、其の周圍に纏繞し來る處の人物が皆藝術界や思想界の立役者であり、海外亡命志士等の群である。(中略)本郷にパン屋を開業してから、新宿中村屋の經營の成功まで、この方面でも立派な立派傳中の女傑とし

◇人の囁評 特に國木田獨歩と佐々城信子の戀愛事件を、血縁の立場にありながら比較的公平に批判せし點は愉快である。それのみならず、明治中期に於ける女學生氣質、並に「女學雜誌」「文學界」

時代に活躍せし思想家諸氏のその知られざる挿話ローマンス等も忌憚なく描かれ、興味盡きざるものがある。ともあれ最近無数に出版される無内容な著書と異り、文化史的に觀ても頗る有意義なるもの、大方讀書家に推薦する次第である。

◇書評 装本は同じく中村屋の食房に佛陀連作のレリーフを作つた美術院の彫刻家大内青圃氏の手になるもの、意識してか、自然にか、甚だ明治大正情趣が出てゐるのも面白い。沈青色絹緞布に金つぶしに枝模様の印度風な文様、見返しは薄朱に沈紅の支那風な大きな漢文字二つ。箱は鶯色地に濃茶と沈黄の印度文様の葉形大きく一つ——尙記事に關係ある珍らかな寫眞が数多く挿入されてゐる。(恩地孝四郎氏)

◇矢吹慶輝氏評 儒教の家に生れた著者が教會通ひを始め、幼な心に佛壇の燈明の前で涙つと掌を合せたくなつた時(四頁)から、獨歩と信子との數奇の運命にも(二〇六頁)、ニコライ會堂でも(二二四頁)、草提希夫人の悩みにも(四二二頁)合掌を續けて來た。特に前篇終りに「若

き日に合せた掌の解かるゝことなく、熱き祈りのうちにこの生命を終りたい」との著者の切なる念願を讀みつつ、佛像禮讃、古寺巡禮の間に「初めはその美に感激するばかりであつたのが、だん／＼掌を合せて禮拜するやうになりました(四二二頁)は、あらゆるもの、歸結を合掌に求められてゐるやうにも思はれる。尤も新樂師寺の本堂に皮下流血の魅力を感じた著者の態度からは單なる偶像崇拜者ではないことは勿論である。唯だ久しく眞と美と力とに憧れて遂に今力の方向を美と善との一致に求められてゐるやうに感ぜられ、そぞろ自分に『華嚴經』の入法界品を思ひ出させずには措かなかつた。

◇高島米峰氏評 讀み去り讀み來つて、僕の頗る敬服したことは、女史の内面生活が如何にも宗教的の豊かであるといふ一點である。如何なる人生悲劇に直面しても、如何なる天災人禍に逢着しても、天を怨まず、人を咄はらず、たゞ懺悔し感謝するといふ敬虔なる態度が文外に溢れて居る。キリスト教で育つて、佛敎に生きるやうになつた女史の心境に、聊かの

無理も不自然もない。それが僕に取つて又なく嬉しい。

◇小島鳥水氏評 繪畫彫刻に於ける萩原碌山、中村彝等天才の仕事が、當中の一隅に閃いてゐるのはこれ又、私には豫期したやうな、意外なやうな拾ひ物である。當中の挿畫(着色版と寫眞版とを問はず)が、いかに明治藝術史上、貴重なもので、極めて潔癖に精選されてゐるかを、理解する人々の一人に、私を加へてもらへば仕合せである。

◇神崎清氏評 僕は「黙移」を讀破して得た多くの具體的事實が、明治文學の資料としていかに貴重なものがあるかについては、別の機會に語りたいと思ふが、こゝでは黒光女史の自叙傳が、決して一場の回顧談にとゞまるものではなく、現代の悩みが多い女性を鼓舞し、激勵する不思議な力に満ちた書物であることを強調しておきたい。この「黙移」が精神の糧として、中村屋のパンの如く、廣く人の間に行き交ふことを希望する者は、僕ひとりではないであらう。

尙詳細なる批評集(六十四頁)あり、御希望の方は郵券二錢封入御申込あれ。

相馬愛藏 著 (經營全集十五冊中の一冊)

商店經營三十年

目次摘要

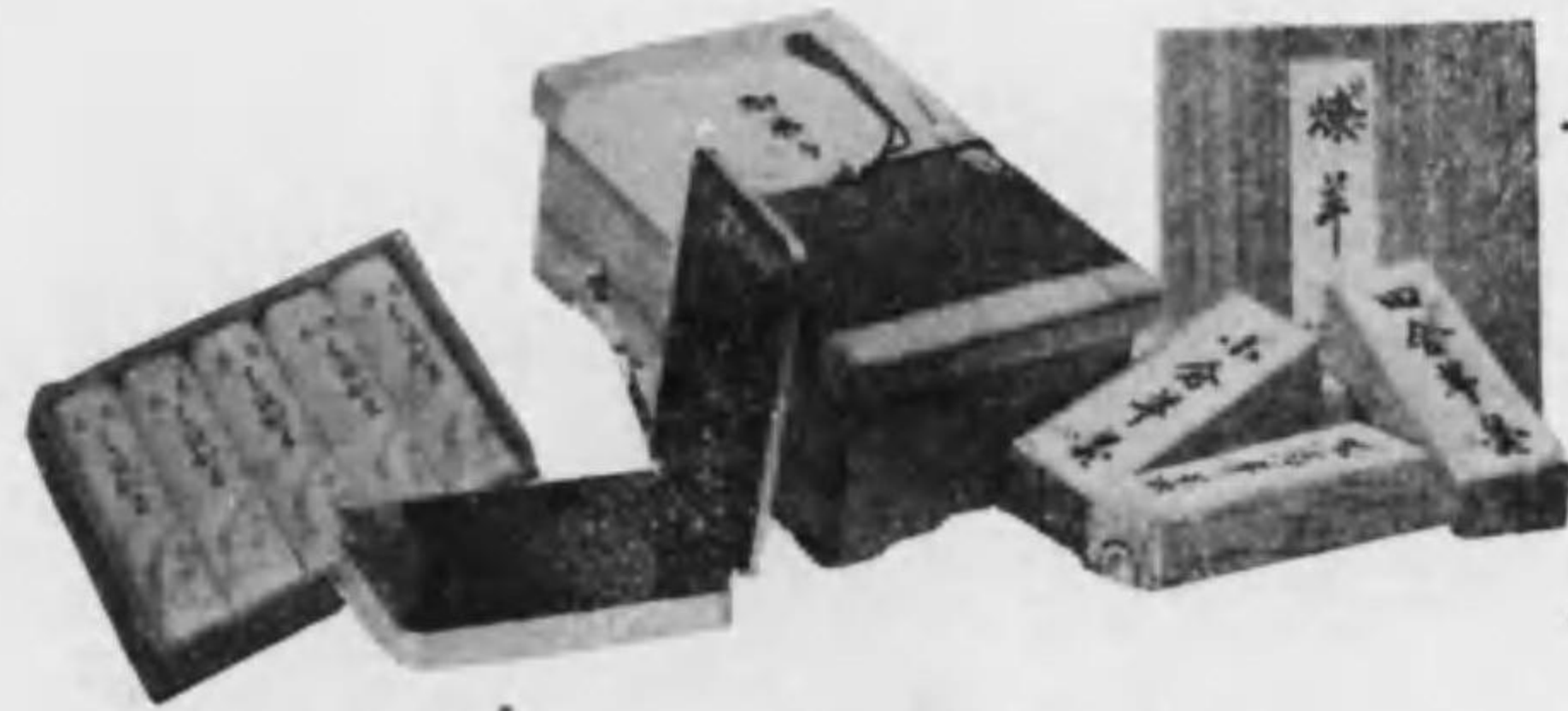
第一部 百貨店對抗策研究	各地に進出する百貨店 教へらるゝ百貨店經營法 小賣商は親切と廉價を賣る 日本商船は如何にして客を取るか 重税に泣く小賣商人 經費節約が第一 仕入と問屋教育 販賣經費の比較 日本商人道の破壊 小賣店獨特の職務 小賣店生の方法 小賣店の既得權擁護 賣上に累進税を課せ 百貨店の没落行程 不合理の商品券 小賣店の不見識 小商店の反省す可き點 外十四項目
第二部 我が商業道	正札禮讃 日本大學講演筆記 専修大學紀念講演 商業は公明正大 商業は社會奉仕の一 商賣の基は勉強 無料配達廢止 中元歳暮廢止 製造販賣能率の平均 賃料節約開始の苦心 商賣は地味にやる可し 家賃の高下 廣告費の程度 信念の商道 商賣繁昌と女主人 繁昌のコツ 小賣本の心得十八ヶ條 一人一店主義 外十八項目
第三部 従業者の待遇	
第四部 一商人として歐洲を視る	無差別待遇 競争制裁嚴禁 利益分配 住宅手當、老人手當、子供手當 店員の休暇問題 スタンレーオホツキー、店員の將來は如何にす可きか 店員の盛衰に就て 新時代の教育に就て 常に店員に感謝す可し 外九項目
第五部 小賣店經營の實際	地方人の東京に來て失敗する理由 新たに商店を開く注意 地方人向きの商賣と其の真相 雇はれる人と雇ふ人 商人の自尊心と商賣の快味

四六判函入本文四百四頁
定價 金壹圓二十錢
送料十錢 (市内六錢)

發行所 東京神田區佐久間町三ノ三ハ トウシン社

- 三十三項目
- 七項目
- 八項目
- 五項目
- 十二項目
- 三項目

罐詰羊羹の特色
 保存期間一年以上
 宣傳の爲め罐代なし
 海外発送に最適



○練羊羹

風味 夏期—二週間
 保存期間 冬期—四週間

練羊羹は保存期間も永く、風雅な其の味は日本菓子之極致で、時代の推移にも拘らず御家庭用又は贈答品として昔々からの生命を保つて居ります。特に弊店の羊羹はSK糖の上品な甘味によつて小倉、白、に江戸前の香りを發揮し、琉球黒糖を加味した、黒光、に於て雅味を表現し、田舎羊羹(保存期間他の半分)に於て小豆の風味を代表して居ります。

▼標準練羊羹

(小倉、黒光、白、三種) 標準大 各一本 一五錢
 杉折入 八本入 一・八五〇 杉折入 二〇本入 二・七〇〇 一六本入 三・二〇〇

▼分厚羊羹

(小倉、黒光、田舎、三種) 標準の三分分 各一包 四五錢
 ボール折入 二本入 〇・九五(三) 三本入 一・四〇(三) 四本入 一・九〇(元)
 杉折入 六本入 三・一五〇 八本入 四・二〇〇 一〇本入 五・二一〇 五本入 二・六五

◆罐詰羊羹

(小倉、黒光、二種) 標準羊羹の四分分 一罐 六〇錢
 贈答用折入 一罐入 〇・六〇(三) 二罐入 一・二〇(三) 三罐入 一・八〇(元)

◇しほがま

(黒光、ゆかり、二種) 各一本 二五錢
 贈答用 木折入 五本 一・六五 六本 二・〇〇 四本 一・〇〇

◇中村屋の羊羹類◇

◇中村屋のカステラ◇

風味 夏期—一週間
 保存期間 冬期—二週間

主要原料 粉 センテナールベツト粉
 砂糖 SK印精製糖
 鶏卵 越ヶ谷本場地玉子

最上粉の風味、SK糖の上品な甘味、地玉子の食べ口「コク」が中村屋カステラの基礎であります。地玉子の味と色調とは末だ科學的に説明されて居りませんが、養鶏卵の到底追従出来ぬものを持つて居ります。絶対無着色

○長崎式カステラ

試食用 一折 二五錢

贈答用折入 六〇〇(四) 九〇〇(三)
 折入 八〇〇(三) 一五〇〇(三)
 杉折入 四〇〇(二) 五〇〇(二) 六〇〇(二) 三〇〇

◇露西亞チョコレート

四五グラム 一五〇錢

最上の原料と、最優秀の技術が中村屋チョコレートの生命であります。内外果實、木實等を使用・味の變化二十餘種。

御贈答用 携入 〇・七五(一) 一〇〇(一)
 小函入 一・五〇(二) 二・五〇(三)
 折入 四〇〇(三) 五〇〇(三) 七〇〇(三)
 丸型 二・八〇(二) 三・五〇(二) 四・五〇(二)
 人物型 二・〇〇(一) 三・〇〇(一) 四・〇〇(一)
 角型 四〇〇(三) 五・五〇(三) 八・〇〇(元)
 塗木折 二・三〇(一) 三・〇〇(一) 五・〇〇(一) (小包便不能)



出に前客儘の此てしと器葉は罐角八術美
すまりあでのもな麗美ぬらかし恥もてし

美術角罐



美術罐入進各物種

品名	試食用	美術角罐入 4.4×4.4×7.5寸	同上二罐 折入り	美術八角罐 高八・五寸 高二・七寸
黒光かき餅	一袋三五	一・四五(三〇)	二・九〇(元)	一・八五(三〇)
黒光あられ	一袋二五	一・四五(三〇)	二・九〇(元)	一・八五(三〇)
あられ詰合	一袋二五	一・四五(三〇)	二・九〇(元)	一・八五(三〇)
かりんとろ	一袋二五	一・〇〇(三〇)	二・〇〇(元)	一・四〇(三〇)
興駄菓子	一袋二五	一・二〇(三〇)	二・四〇(元)	一・五五(三〇)
三色あげ	一袋二五	一・〇〇(三〇)	二・〇〇(元)	一・四五(三〇)
五色あられ	一袋二五	一・一五(三〇)	二・三〇(元)	一・五五(三〇)
大野菓子	一袋二五	〇・九五(三〇)	一・九〇(元)	一・三五(三〇)
デセール	一封八〇	二・八五(三〇)	五・七〇(元)	三・一五(三〇)
ラズル	一袋二五	〇・九五(三〇)	一・九〇(元)	一・四〇

美術的罐入は(濕氣を防ぎ)實用的な高級贈答品の體裁を備へ、地方及海外に送られて絶大の御好評を博す。

日常の紅茶、番茶の友として
御子様方の「オヤツ」として

最好適!!

高級 乾菓子及御番茶菓子類

い安の賃運て全安て牢堅
法方り送荷の屋村中



◇地方發送御注文は簡單で安全◇

○御注文方法

- 1 御注文に對しては迅速、丁寧に手配致し、直ちに發送濟證書を御手元に御送り致します。
- 2 御支拂金額は左の如き合計となります。

イ 商 品 價 格 (書留便は五割増) 合 計
ロ 郵 送 料 (外國行二〇錢)
ハ 荷造費 一〇錢 (外國行二〇錢)

但し外木箱製作の場合二〇錢以上

御 注 意
普通郵送料金はカタログ中の商品値段下の括弧内数字であります。八〇〇軒以内の御地方の場合は鐵道便に爲して御損のかゝらぬ様注意致します。外國及殖民地行きは夫々郵送料が高くなります。

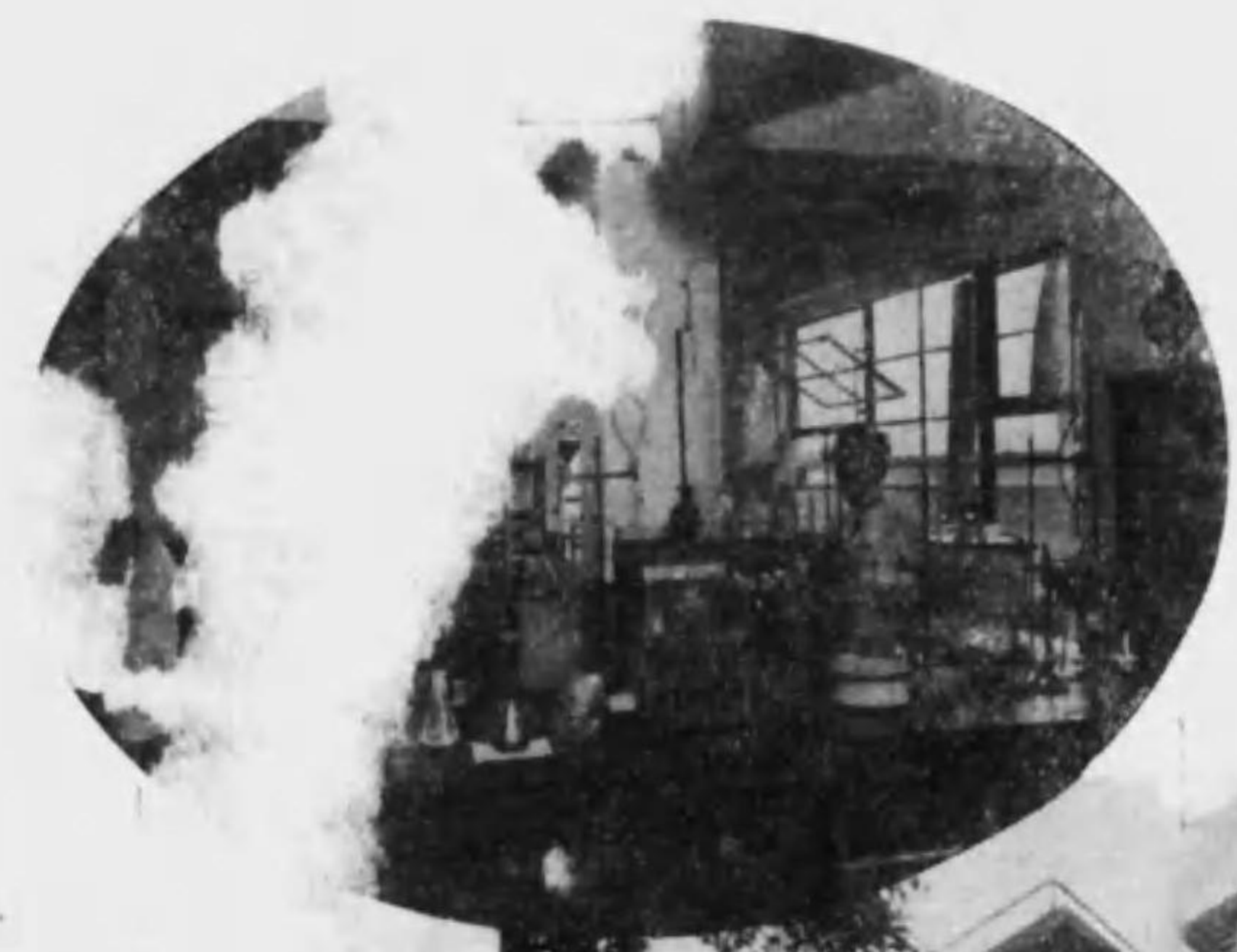
○地方御華客様口座

地方からの御注文に於ては、品物の數量、送料の相違等の爲め過不足無き御送金は中々の御困難と存じます。そこで、御注文の際はカタログに據つて大體御見當の金額を御送り下されば、直ちに御注文品を發送致し、同時に發送濟證書と過不足の精算書を御送附致します。尙少額の過不足金は地方御華客様口座に記帳致して、次回御注文の際決済致す方法を探り一切御手数数を御煩はしせぬ様致します。

○御送金方法：振替(東京八三三九)、小爲替、代金引換便等。

342
1020

誠實と 研究の店



中村屋第二工場附屬食糧研究所

食糧

中村屋は従来より、最上原料を使用し、而かも製造過程の合理化に據つて製品の可及的安價を心懸けて参りましたが更に一層の完全を期する爲め數年前より糧食研究所を設けて、其の實驗、検査、研究の結果、製品に對する絶對的自を深めつゝあります。

將來は尙ほ、味の研究を爲すと共に各種榮養素を加味、増加し、以て皆様御期待に添はん事を期して居ります。

講話第三輯 〔非賣品〕

編輯 兼 發行人
山田健三
東京市淀橋區角筈一ノ一二

印刷人
宮澤武雄
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發行所
中村屋
東京市淀橋區角筈一ノ一二

講話第一輯（價十五錢）第二輯（價二十錢）共神田區神保町矢口謙郎氏の發行でありましたが、第三輯より中村屋が之を引受けて爾後引續發行する事となりました。従來は販賣品でありましたが、今日より無料頒布（一輯二輯共）する事と改めました故、希望の方は郵送料として一部當り二錢を添へて御申越して下さい。

中村屋謹告

大日本印刷株式會社印刷

終

